

『大乘無量寿莊嚴經』における声聞成仏

藤 眞 智

1. はじめに

『大乘無量寿莊嚴經』は、〈無量寿經〉の異本で宋の法賢が、淳化2（991）年10月に、中天竺からもたらされた梵本を漢訳した。〈無量寿經〉の最後の漢訳である。

〈無量寿經〉には現在、5本の漢訳と『梵本』と『チベット訳』が存在する。現存する5本の漢訳とは、次の5つの經典である。¹⁾

- ①『阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道經』（以下『大阿弥陀經』という）二卷、呉・支謙訳（222年または223-228年または253年、但し訳者に異説あり。）
- ②『無量清浄平等覚經』（以下『平等覚經』という）四卷、後漢・支婁迦讖訳（実際は、魏・帛延（または白延）訳（258年ころ）と推定される。但し異説あり。）
- ③『無量寿經』二卷、曹魏・康僧鎧訳（実際は東晋・仏陀跋陀羅と劉宋・宝雲の共訳（421年）と推定される。但し異説あり。）
- ④『大宝積經第五会 無量寿如来会』（以下『如来会』という）二卷、唐・菩提流志訳（706-713年）
- ⑤『大乘無量寿莊嚴經』（以下『莊嚴經』という）三卷、宋・法賢訳（991年）

各異本の本願の数に違いがあり、その数の違いから『大阿弥陀經』と『平等覚經』は「二十四願」、『無量寿經』と『如来会』と『梵本』と『チベット訳』は「四十八願系」²⁾、『莊嚴經』は「三十六願」と分類して呼ばれている。

『莊嚴經』は唯一の「三十六願」であり、他の諸異本にはない特徴がいくつも見られる。その中でも「声聞成仏」を説くことは、他の諸異本にはない、

『莊嚴經』だけの特徴である。

「声聞成仏」とは、「声聞は阿羅漢にはなれるが、仏のさとりは得られない。」とする大乘仏教において、「声聞も仏のさとりを得られる。」と説くものである。この「声聞成仏」がなぜ『莊嚴經』で説かれたのか、その背景に何があったのかを探ることがこの研究のテーマである。

そこで本研究では、宋代に多くの経典が漢訳されたことに注目し、同時代に漢訳された経典を調査して、『莊嚴經』の表現と類似点を抽出する。そしてその関係性の考察を通して『莊嚴經』において「声聞成仏」が説かれた背景を明らかにしようとするものである。

ここで『莊嚴經』を取り上げた先行研究を確認する。その始まりは「三十六願」の『莊嚴經』が「四十八願系」より古い成立であるとの説が提起されたことにあった。その後反対に「四十八願系」の方が「三十六願」より古いという説が出され、様々な議論が展開された。研究が進み「三十六願」は「四十八願系」より後の成立であろうと明らかになると、『莊嚴經』を取り上げた研究はめっきり減少した。³⁾

その中で『莊嚴經』を取り上げた研究として、大田利生氏（1973-1975）、林和彦氏（1990）、川元恵史氏（2011）の研究がある。大田氏と林氏の研究の中に「声聞成仏」について触れられているので、その内容を概略する。

まず大田氏は「声聞成仏」が説かれていることを指摘したうえで、「二乗を排斥するのではなく、すべてを一仏乘に帰入せしめようとする思想は、『法華経』の影響と考えることができよう。」と指摘されている。⁴⁾

次に林氏は「声聞成仏」など『莊嚴經』が二乗に対して寛容な態度であることを指摘し、「これらの経典を伝持した集団では声聞・縁覚が充分尊敬に値する存在であると考えられていたか、またはその集団に彼らが参加していたことを想定させる。」と指摘されている。⁵⁾

これらの研究で指摘された点については、「声聞成仏」が説かれた背景を考察する中でその妥当性を確認したい。

2. 『莊嚴經』の「声聞成仏」の思想

はじめに『莊嚴經』の「声聞成仏」の思想を確認する。

『莊嚴經』では、三十六願のすべてにおいて一切衆生などの対象者を成仏させることを誓願している。そのなかで具体的に声聞を対象としているのが、第九願、第二十八願、第三十三願の三つの願文である。各願文の内容を第九願、第三十三願、第二十八願の順に確認する。

第九願：世尊。我得菩提成正覚已。所有衆生令生我刹。雖住声聞縁覚之位。 往百千俱胝那由他宝刹之内。遍作仏事。悉皆令得阿耨多羅三藐三菩提。（大正 12.0319b26～29）

世尊。我れ菩提を得、正覚を成じ已らば、所有衆生をして我が刹に生じせしめん。声聞縁覚の位に住すと雖も、百千俱胝那由他の宝刹の内に往き、遍く仏事を作し、悉く皆、阿耨多羅三藐三菩提を得しめん。

まず第九願は、声聞縁覚であっても極楽世界に往生させて、他の往生者と同様に、諸仏国土へ行き諸仏を供養してさとりに到らせることを誓願している。

ここであえて声聞であってもとしているのは、声聞も含めて成仏させることを無量寿仏の誓願の中で明確に示したと考えられる。

第三十三願：世尊。我得菩提成正覚已。所有十方一切仏刹声聞菩薩。聞我名号証無生忍。成就一切平等善根。住無功用離加行故。不久令得阿耨多羅三藐三菩提。（大正 12.0320c13～17）

世尊。我れ菩提を得、正覚を成じ已らば、所有十方の一切の仏刹の声聞菩薩、我が名号を聞いて無生忍を証し、一切の平等の善根を成就す。無功用に住し加行を離れるが故に久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を得しめん。

第三十三願は、すべての仏国土にいる声聞と菩薩が、無量寿仏の名前を聞いて無生忍を証し、一切の平等の善根を成就し、無功用の状態となって、修行を離れてほどなくしてさとりに到らせることを誓願している。

ここではあらゆる十方の仏国土の声聞は、菩薩と同じように扱われている。

また極楽世界への往生は示されておらず、声聞は各々のいる仏国土において、成仏すると考えられる。

第二十八願：世尊。我得菩提成正覚已。所有十方無量無辺。無数仏刹声聞縁覚。聞我名号修持浄戒。堅固不退速坐道場。成就阿耨多羅三藐三菩提。(大正 12.0320b12～15)

世尊。我れ菩提を得、正覚を成じ已らば、所有十方の無量無辺無数の仏刹の声聞縁覚、我が名号を聞いて浄戒を修持し、堅固にして退かず、速かに道場に坐し、阿耨多羅三藐三菩提を成就せん。

第二十八願は、あらゆる十方無数の仏国土の声聞縁覚に対して、無量寿仏の名前を聞いて浄戒をしっかりと修持し続けることで、速やかに道場に坐してさとりに到らせることを誓願しているのである。

ここではまさに声聞と縁覚を特定してさとりに到らせるとしているのである。そしてここにおいても極楽世界への往生は示されず、各々の仏国土で成仏すると考えられる。

そしてここでポイントになるのは「浄戒をしっかりと修持し続けることで道場に坐して」という内容に声聞道が含まれるかということである。この内容は仏教徒にとって共通して求められる教えなので、声聞道も含まれると考えられる。

次に成就文を確認する。成就文には声聞を特定して成仏するという箇所はない。しかし成仏する対象の中に声聞も含むと考えられる箇所があるので、ここに示す。

仏告慈氏。若有苾芻苾芻尼優婆塞優婆夷天龍藥叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等。於此經典書寫供養受持讀誦。爲他演説。乃至於一昼夜。思惟彼刹及仏身功德。此人命終速得生彼。成就阿耨多羅三藐三菩提。(大正 12.0326a18～23)

仏慈氏に告げ給わく。「若し苾芻・苾芻尼・優婆塞・優婆夷・天龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等有りて、此の經典に於て書寫し供養し受持し讀誦し他の爲に演説し、乃至一昼夜に於

て、彼の刹及び仏身の功德を思惟せん。此の人、命終して速かに彼に生ずることを得て、阿耨多羅三藐三菩提を成就せん。」

ここでは、苾芻・苾芻尼から人・非人等に到るまでの者が、この經典を書き供養し受持し読誦し他人の爲に演説し、一昼夜、極楽世界や無量寿仏の仏身の功德を思いはからえば、その人が亡くなるとすぐに極楽世界に往生して、さとりには到るとする。対象の中に「苾芻・苾芻尼」とあるので、「声聞」も含まれると考えられる。

ここで説かれる「この經典を書き供養し受持し読誦し他人の爲に演説し」というくぐり、＜無量寿經＞の諸異本の中で、『莊嚴經』において初めて説かれたものである。

以上『莊嚴經』に説かれる「声聞成仏」の内容を見てきた。それをまとめると次のようになる。

『莊嚴經』は、誓願においてあえて声聞を特定してさとりには到らせると明確に宣言したところに＜無量寿經＞の諸異本にない大きな特徴がある。

声聞がさとりには到る場所については、極楽世界に往生してさとりには到る場合と、極楽世界に往生せず、各々の仏国土においてさとりには到る場合が説かれている。

声聞がさとりには到る過程で行なうことは、菩薩道に限られたことではなく、声聞道も含まれると考えられる。そして、この經典を書き供養し受持し読誦し他人の爲に演説し、もしくは一昼夜、極楽世界や無量寿仏の仏身の功德を思いはからうことで極楽世界に往生してさとりには到るとするのである。

そして声聞がさとりには到る時間は「不久」や「速」とされ、さほどの時間を要しないのである。

3. 『莊嚴經』の「声聞成仏」の思想の背景

①同時代の漢訳本との比較

『莊嚴經』の漢訳と同時代に漢訳された經典の内容を調査し、『莊嚴經』と

の類似点を抽出し、『莊嚴經』との関係性を考察する。ここでいう類似点とは、成仏に関して『莊嚴經』に見られる「得（成就）阿耨多羅三藐三菩提」と同じような表現を指す。例えば「証得無上正等正覺」や「証大菩提」等の表現である。その中に声聞を対象とする経典が有るか無いかのポイントとなる。

今回の調査の対象とする経典は、法賢（旧名天息災）⁶⁾が漢訳事業に関わった太平興国7（982）年から亡くなる前年の咸平2（999）年まで⁷⁾に漢訳された185の経典とする。

185の経典の種別の内訳については次の表の通りである。

この表は武内孝善氏が作成した「宋代翻訳経典編年目録」に記載されている経典を集計して作成した。⁸⁾

阿含	本縁	般若	華嚴	宝積	経集	密教	律	論集	合計
15	3	7	2	4	30	105	5	14	185

今回の調査の結果は次の通りである。

まず声聞を成仏の対象に含める経典を一つ確認することができた。

その経典は『仏説五十頌聖般若波羅蜜經』（以下『五十頌般若』という）である。該当部分は次の箇所である。

若有善男子善女人及諸声聞縁覺。愛樂修学無上菩提者。汝等之人。於此般若波羅蜜經。聽受読誦分別演説速獲正覺。（大正 08.0845c29～0846a03）

若し善男子善女人及び諸声聞縁覺有りて、無上菩提を愛樂し修学する者は、汝等、之の人、此の般若波羅蜜經に於て、聽受し読誦し分別し演説せば、速かに正覺を獲。

本經では、声聞、縁覺も善男子善女人と同じように、無上菩提を愛樂し修学する者は、本經を聽受し読誦し分別し演説するならば、速やかにさとりを得ると説かれる。つまり声聞も無上菩提を求め、それを目指して修行すれば、成仏の道が開かれているのである。

般若經は「声聞の人、般若波羅蜜を学びて阿羅漢道を得。」（『摩訶般若波

羅蜜經』大正 08.0293b24～25) とする經典であるにも関わらず、『五十頌般若』に「声聞も成仏できる」と説かれるのは、なぜであろうか。

本經についての先行研究を確認することはできなかった。そこで本經の教説からその背景を検討したい。

本經は般若經群の中で、通常の般若經のうちの短縮形般若經に分類され⁹⁾、新修大藏經の一頁の 2/3 ほどの短い經典である。その内容は、仏が王舎城で須菩提に説いたもので、仏が「此の般若波羅蜜經、所有る声聞法、縁覚法、菩薩法、菩提分法及び一切諸仏一切般若波羅蜜法、平等にして一の如くに聚集摂受す」と説くと、須菩提がその真意を問う。それに対して仏が「所有る六波羅蜜、十八空、四念処、四正断、四神足、五根、五力、七覚支、八聖道、四聖諦、四無色、八解脱、九分法、三解脱門、一切三摩地総持門、四智、五通、一切如来十力、四無所畏、大慈、大悲、十八不共法、四沙門果、縁覚果、菩薩一切道智、是の如き一切善法、一切般若波羅蜜、悉く皆聚集し平等に摂受し、一の如く異ること無し」と説く。(大正 08.0846a08～28)

つまり本經は「声聞法も菩薩法も一切諸仏一切般若波羅蜜法と平等で一つである」として、その理由は「一切の善法と一切の般若波羅蜜は一つである」と説くのである。本經で説かれる内容はこの一点であり、「本經を聴受し誦誦し分別し演説するならば、速やかにさとりを得る」とするのである。

この教説と類似する教説が、同時代に漢訳された二つの般若經典に確認できる。

一つは『五十頌般若』と同じ淳化 2 (991) 年に法賢によって漢訳された『仏母宝徳蔵般若波羅蜜經』(以下『宝徳蔵般若』という)である。

その「般若伽陀現世品第十二」に「是の如く、世間諸の如来乃至縁覚及び羅漢迨及、般若波羅蜜は皆一味の法にして分別を離る」と説かれているのである。(大正 08.0679c14～15)

『宝徳蔵般若』はその梵本の奥書によれば、『八千頌般若』の品に従って作られたものとされ、三十二品からなる般若經典である。¹⁰⁾

もう一つは『八千頌般若』の異本で景德 1 (1004) 年に施護が翻訳した『仏母出生三法蔵般若波羅蜜多經』(以下『仏母般若』という)である。その「顯示世間品第十二」に「是の故に、如来と彼の声聞縁覚果及び五蘊世間乃至一

切法は同一如なり」と説かれているのである。(大正 08.0631b24 ~ 25)

『仏母般若』は三十二品からなり、『宝徳蔵般若』と品数で同じであることから、上記の『宝徳蔵般若』は、『仏母般若』を偈頌の形にしたものとされる。¹¹⁾

このように『五十頌般若』にみられる教説は『五十頌般若』だけに説かれる特別な教説ではなく、宋代に漢訳された他の般若經典にも類似の内容が説かれていることがわかる。

以上、限られた内容から『五十頌般若』が声聞を成仏する対象に加えられた背景を検討した。『五十頌般若』の教説は、同時代に漢訳された他の般若經典にもみられるものでありながら、『五十頌般若』にだけ「声聞成仏」が説かれ、他の般若經典には説かれていなかった。つまりこの教説が「声聞成仏」に結びついたとは考えられず、『五十頌般若』が声聞を成仏する対象に加えられた背景は解らなかつた。

『五十頌般若』が「声聞成仏」で踏み込んだことは事実であるが、その背景は明らかではなく、これをもって、般若經典が「声聞成仏」を認める立場へと発展したとは言えない。

このように見てくると、『五十頌般若』に説かれる「声聞成仏」が『莊嚴經』に説かれる「声聞成仏」に影響を与えたとは考えられない。

よって今回の調査のポイントであった『莊嚴經』の「声聞成仏」に対しては直接的に関係があると思われる經典は見つからなかつたことになった。

但し今回の調査によって、『莊嚴經』との類似点を 24 經典で確認することができた。その内訳は、密教經典が最も多く 15 經典¹²⁾で、次いで般若經典が 6 經典¹³⁾、經集部經典が 2 經典¹⁴⁾、宝積部經典が 1 經典¹⁵⁾であった。15 の密教經典には後期密教經典ばかりではなく、『大乘莊嚴宝王經』(以下『宝王經』という)のように初期密教に分類される經典¹⁶⁾も確認された。

つまり宋の初期の時代に、インドから将来した經典の 1 割強が成仏を説く經典であったということである。その中に『莊嚴經』も含まれていたわけである。

「成仏する対象」として、一番多く見られたものが「人」や「衆生」を対象とする經典で、14 經典¹⁷⁾で確認された。『莊嚴經』も「一切衆生」を成仏する対象としており、共通点として指摘できる。

「成仏する因」として、一番多く見られたものが「經典を受持し読誦し解説し聴聞する」というもので、11 經典¹⁸⁾で確認された。この因は、先にも述べたように『莊嚴經』の成就文にも見られたものである。このフレーズはもともと『法華經』や『般若經』に説かれたものであるが、その影響が広く及んでいたことを示している。そしてこの因によって得られる功德が、成仏にまで拡大したといえる。『莊嚴經』にもそれが現れたと考えられる。

もう一つ、「成仏するまでの時間」として『莊嚴經』に見られる「不久」とか「速」の語が、11 の密教經典¹⁹⁾と6 の般若經典²⁰⁾、1 つの經集部經典²¹⁾の合計 18 の經典で確認された。6 の般若經典のうち 4 經典は密教系般若經典であるので、それを含めると密教系の經典は 15 經典ということになる。

密教經典の中から初期密教經典である『宝王經』を具体例として見ていきたい。『宝王經』は觀自在菩薩の様々な所業を説く經典である。その後半では觀自在菩薩の本心である六字大明陀羅尼が説かれ、六字大明陀羅尼を念ずることにより速疾に成仏すると説かれるのである。該当箇所を以下に引用する。

若有善男子善女人。而能依法念此六字大明陀羅尼。是人而得無尽弁才。(中略) 是人於其口中所出之氣触他人身。所触之人發起慈心離諸瞋毒。当得不退轉菩薩。速疾証得阿耨多羅三藐三菩提。(大正藏 20.0059c06 ~ 13)

若しは善男子善女人有りて能く法に依りて此の六字大明陀羅尼を念ぜば、是の人は無尽の弁才を得。(中略) 是の人の其の口中に於て出づる所の気は他人の身に触れ、触れる所の人には慈心を發起し、諸の瞋毒を離れて当に不退轉菩薩を得て、速疾に阿耨多羅三藐三菩提を証得すべし。ここでは初期密教でも速疾成仏が説かれていたことが確認できる。

次に密教系般若經典の一つである『徧照般若波羅蜜經』(以下『徧照般若』という)を見てみる。『徧照般若』は『大般若波羅蜜多經』第十会般若理趣分(以下『理趣分』という)の異訳²²⁾である。内容は 14 の法門について教説を述べてそれぞれの得益を示す。その得益に速疾成仏が説かれるのでここにあげる。

遍照如来告金剛手菩薩。此般若波羅蜜經。說一切如来寂法菩提。(中略)皆是大菩提。能除一切妄想等。若有人聽受讀誦恭敬供養。所有一切罪障皆得消除。乃至得坐菩提道場。速証阿耨多羅三藐三菩提。」(大正藏 08.0782a24 ~ b01)

遍照如来は金剛手菩薩に告げ給わく。「此の般若波羅蜜經、一切如来の寂法なる菩提(中略)を説き給う。皆是れ大菩提なり。能く一切の妄想等を除けり。若し人有りて聽受し讀誦し恭敬し供養せば、所有一切の罪障、皆消除するを得。乃至菩提道場に坐するを得て、速かに阿耨多羅三藐三菩提を証ぜん。

玄奘訳の『理趣分』の該当箇所も「疾証無上正等菩提」(大正藏 07.0987b24)となっており、玄奘の時代から得益として速疾成仏が説かれていたもので『徧照般若』で付加されたものではない。

このように『理趣分』ひいては『徧照般若』で説かれる速疾成仏が密教の影響であるとすれば、『莊嚴經』で説かれる速疾成仏も密教の影響だと考えられる。

同時代の漢訳本との比較調査では、『莊嚴經』でなぜ「声聞成仏」が説かれたかについて、その背景を明らかにすることはできなかった。

しかし成仏に関して、多くの經典に『莊嚴經』との共通点がある事を確認することができた。「成仏する対象」と「成仏する因」と「成仏するまでの時間」について、多くの經典と共通点が確認されたことは、『莊嚴經』がそれらの經典から影響を受けている可能性が高いということを示していると考えられる。特に「成仏するまでの時間」については密教からの影響を受けていると考えられる。

②『法華經』からの影響

「声聞成仏」を説く經典として『法華經』がある。『莊嚴經』の「声聞成仏」は『法華經』の影響が考えられるとした大田氏の指摘があることは先に述べた。その指摘も踏まえて『法華經』からの影響について検討する。

まず『法華經』に説かれる「声聞成仏」の思想を簡単にまとめる。

『法華經』では、舍利弗を始めとして多くの声聞に対して個別に授記がな

されて、将来、成仏することが釈尊から説示される。この背景は、『法華経』が「諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なることを得さしめんと欲するが故に、(中略)衆生に仏の知見を示さんと欲するが故に、(中略)衆生をして仏知見を悟らしめんと欲するが故に、(中略)衆生をして仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現し給う。舍利弗よ。是を諸仏は一大事の因縁を以ての故に、世に出現し給うと爲す。」と説き、これに続いて「如来は但一仏乗を以ての故に衆生の爲に法を説き給う。余乗の若しは二若しは三有ること無し。」と説くことにある。(『妙法蓮華経』大正 09.0007 a23～03)

つまり「諸仏の教えというものは、すべての人を仏にさせるというただ一つの教えであってそれ以外にはない。」²³⁾ という「一乗眞実三乗方便」と言われる教えによるものである。

『法華経』の説く「声聞成仏」は、声聞乗を成仏に到る一つの過程と捉え、声聞が目指す阿羅漢は最終の到達点ではなく、その先に成仏という到達点があることを新たに明らかにしたのである。そして声聞が成仏に到る過程として、声聞が仏から法華経の教えを聞き、それを領解した上で、仏から授記を受けて、その後に菩薩道を行ずることで、さとりて到るとするものである。

『法華経』に説かれる声聞について、四種の別があると説いたのが世親である。『妙法蓮華経憂波提舍』(以下『法華経論』という)の中で、「声聞に四種有り。一は決定声聞、二は増上慢声聞、三は退菩提心声聞、四は応化声聞なり。二種の声聞に如来授記せり。謂ゆる応化の者と退已還発菩提心の者なり。若しは決定の者、増上慢の者の二種の声聞あらば、根未熟の故に授記を与えず。」(大正 26.0009a15～19)と説かれるのである。

この『法華経論』は、インドでの唯一の『法華経』の論書として、インドにおける『法華経』の受容を伝える貴重な資料である。そのため、『法華経論』は『法華経』の解釈に大きな影響を与えた。²⁴⁾

しかしこの点について横超氏は「四種は経の本意上表現の技術的な面の不同に外ならず、眞意はみな共通して一乗眞実三乗方便の根本義を開顕する手段であったことを忘れてはならない。」と述べて、四種の別をことさらに論ずることとは、『法華経』の根本義を離れることになりかねないと指摘している。²⁵⁾

『法華經』においては『法華經論』が主張する「決定の声聞と増上慢の声聞は授記せず」とは説かれているわけでないので、ここでは、『法華經』の「声聞成仏」は、『法華經』の根本義である「諸仏の教えは、すべての人を仏にさせるというただ一つの教えであってそれ以外にはない。」ということをも明らかにするために、その具体例として説かれたものであると理解する。

以上が『法華經』に説かれる「声聞成仏」である。

『法華經』は「声聞成仏」を説く唯一の經典である。他の大乘經典では声聞は成仏できないと説かれた。それに対して『法華經』はすべての者たちが成仏できることを一仏乗で示し、声聞にも成仏の道を開いたことは、他の大乘經典には見られない大きな特徴である。『莊嚴經』があえて声聞を特定して、その成仏を説いている背景には、『法華經』の影響があったと考えることが自然である。

そして『法華經』が諸仏の教えはすべての人を仏にさせるという一仏乗であると示したように、『莊嚴經』も阿弥陀仏の誓願によってあらゆる者たちを成仏させるということを明確に示しており、その点でも『法華經』からの影響が考えられる。

その上、もともと『法華經』に説かれていた「經典を受持し読誦し解説し聴聞する」ことが、『莊嚴經』では成仏の因として説かれていることを考え合わせると、直接的にはないにせよ『法華經』からの影響があったと考えられる。

しかし『莊嚴經』の説く「声聞成仏」は『法華經』の説く「声聞成仏」とは、次の点に違いが見られる。

まず「成仏に到るまでの過程に行う行」である。『法華經』では「菩薩道を行ずる」としているが、『莊嚴經』では先に見たように「声聞成仏」が説かれる3つの本願のうち、第二十八願において「淨戒を修持し、堅固にして退かず、速かに道場に坐す。」(大正 12.0320b14～15)とする内容に声聞道も含まれると考えられる。『莊嚴經』で声聞道を明確に除外していない点で『法華經』との違いが見られる。

次に「成仏する場所」である。『法華經』では声聞はそれぞれの記別され

た仏国土で成仏すると説かれている。これに対して『莊嚴經』では極楽世界に往生して成仏するか、もしくは各々がいる仏国土で成仏すると考えられるので、この点について、違いが見られる。

最後に「成仏するまでの時間」である。『法華經』では「無量無辺不可思議劫を過ぎて未来世に於いて」（『妙法蓮華經』大正 .09.0011b16～18）という非常に長い時間がかかるとされる。これに対して『莊嚴經』では「久しからず」もしくは「速やかに」と示されていることからさほどの時間を要しないところに違いが見られる。

このように『法華經』の「声聞成仏」と『莊嚴經』の「声聞成仏」には明らかな違いがある。

このような違いは、『莊嚴經』の成立が『法華經』の成立より、数百年後であったため、『莊嚴經』がそのほかの影響を受けたことによるものと考えられる。

そのほかの影響として、①同時代の漢訳本との比較の項で確認したように、同時代の漢訳本の中に『莊嚴經』と同じように成仏を説く経典があり、それらの経典から影響を受けていると考えられる。特に「成仏するまでの時間」については、密教からの影響を受けているのではないと思われる。

③声聞に寛容な集団について

次に林氏が『莊嚴經』の「声聞成仏」の背景として指摘した「二乗に対して寛容な集団」の存在ということについて検討する。この「二乗に対して寛容な集団」とは、林氏の言によれば、「声聞・縁覚が充分尊敬に値する存在であると考えられていたか」、または「その集団に彼らが参加していた。」という集団である。²⁶⁾

この定義だけでは想定される集団の性格は、はっきりしないので、ここでの検討では声聞と菩薩が共存していた集団と捉えて、その存在の可能性を検討したい。

佐々木閑氏が、アショーカ王の時代に行われた破僧定義の変更によって、それ以降、一つの仏教僧団に教義の異なる集団が共存することが可能になったことを立証した。²⁷⁾ そしてそのような集団の中から、大乘仏教が発生した可能性を指摘した。²⁸⁾

一つの仏教僧団に教義の異なる集団が共存できるという佐々木氏の指摘に従えば、林氏の想定するような集団は存在した可能性はあると言える。

そして玄奘が『大唐西域記』において、7世紀のインドの国々の様子を記録しているが、その中で当時のインドにおいて、15の国の寺院で大小二乗を学んでいることが記録されている。²⁹⁾

ただし『大唐西域記』では、「大乘小乗、兼ねて功して習学す」（大正51.0896b07）と記すだけで、具体的にそれらの寺院でどのような活動が行われていたのかは定かではない。しかしこの記録は、佐々木氏が立証した仏教教団の在り方が、7世紀のインドにおいて、実際に行われていたことを示していると言えると思う。

また玄奘の後にインドを巡った義浄の『南海寄帰内法伝』には、「其の致を考えるに、則ち律檢、殊ならず。齊しく五篇を制し、通じて四諦を修す。若し菩薩を礼し大乘經を読まば、之を名づけて大と爲す。斯の事を行わざれば、之を号して小と爲す。」（大正08.0631b24～25）とある。ここでは戒律に違いがなく同じように五篇を制し、四諦などを修していれば、大乘と小乗の違いは、菩薩を礼拝し大乘經を読誦する人たちを大乘と呼び、それらをしない人を小乗と呼ぶと記録されている。つまりこの記録からも、大乘の人達と小乗の人達が共存していた集団が実際に存在していたと考えられるのである。³⁰⁾

このような事象から判断すれば、林氏が想定する集団は存在した可能性はあると考えられる。しかしその集団の存在が具体的に『莊嚴經』の「声聞成仏」の思想に結びついたのかについては、明らかではない。よって林氏の指摘は根拠に乏しいと言わざるを得ない。

以上が背景についての検討である。

4. まとめ

この研究の目的は、『莊嚴經』の数ある特徴の中で特に際立った「声聞成仏」について、なぜ「声聞成仏」が説かれたのか、その背景に何があったのかに

ついて明らかにしようとするものであった。

そのために①同時代の漢訳本との比較、②『法華経』からの影響、③声聞に寛容な集団の存在という三つの切り口から検討を行った。

同時代の漢訳本との比較では、唯一『五十頌般若』に「声聞成仏」が説かれていたが、その背景は不明であった。よって『莊嚴経』に影響を与えたとは考えられず、『莊嚴経』の「声聞成仏」に関係のある経典は見つからなかった。

しかし成仏に関して、同時代の漢訳本の多くに『莊嚴経』との共通点がある事が明らかになった。「成仏する対象」と「成仏する因」と「成仏するまでの時間」について、『莊嚴経』の表現と共通の表現が多くの経典で確認できたことは、それらの経典から『莊嚴経』が影響を受けている可能性が高いことを示している。特に「成仏するまでの時間」については密教からの影響を受けていることは明らかだと考えられる。

また『法華経』からの影響の検討の結果、『法華経』が「声聞成仏」を説く唯一の経典であることから、『法華経』の影響があったと考えることが自然である。しかし個々の教説を比較するといくつかの点で『莊嚴経』と『法華経』で主張の違う点が確認される。このような違いは、『莊嚴経』の成立が『法華経』の成立より、数百年後であったため、『莊嚴経』がそのほかの影響を受けたことによるものと思われる。

そして声聞に寛容な集団の存在の検討では、そのような集団は存在したであろうが、それが直接「声聞成仏」に結びついたのかは明らかではない。

今回の研究では、『莊嚴経』と同時代の漢訳本との比較調査を通して、成仏に関して『莊嚴経』と多くの経典との間で共通点を見出すことができた。特に成仏の速疾性について『莊嚴経』は密教の影響を受けていることが明らかになった。

しかし「声聞成仏」の背景については、様々な経典をあたったが十分ではなく、今後の課題となった。『莊嚴経』で説かれる成仏思想についてさらに研究を進めていきたい。

<参考文献>

- 池本重臣 1952「後期無量寿經の教理的展開」『龍谷大学論集』334
- 池本重臣 1961「無量寿經諸本の成立過程—特に宋訳莊嚴經について—」
『龍谷大学論集』367
- 横超慧日 1969『法華思想』平楽寺書店
- 大田利生 1973「無量寿經諸異本の比較研究—とくに原本成立前後の問題
に関して—（無量寿經の研究（共同研究）」『龍谷大学仏教文化研究所
紀要』12集
- 大田利生 1974「無量寿莊嚴經における二、三の問題（親鸞撰述に おけ
る引用文の研究（共同研究）— 1 —）」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』
13集
- 大田利生 1975「法賢訳『無量寿莊嚴經』における若干の問題（親鸞撰述
における引用文の研究（共同研究）— 2 —）」『龍谷大学仏教文化研究
所紀要』14集
- 小澤勇貫 1956「無量寿經思想発達の一断面—大乘無量寿莊嚴經の特異性
—」『大正大学研究紀要』第41輯
- 香川孝雄 1975「無量寿經類における浄土觀の展開」『印度学仏教学研究』
第24卷第1号
- 春日井真也 1952「原始無量寿經思想形態推定への課題」『仏教文化研究』
通号2
- 川元恵史 2011「『大乘無量寿莊嚴經』における成仏思想」『龍谷大学大学
院文学研究科紀要』33号
- 三枝充憲 1971『般若經の真理』春秋社
- 佐々木閑 2000『インド仏教変移論—なぜ仏教は多様化したのか—』大蔵
出版
- 佐々木閑 2002「部派仏教の概念に関するいささか奇妙な提言」『櫻部建博
士喜寿記念論集 初期仏教からアビダルマへ』平楽寺書店
- 椎尾辨匡 1936「仏母宝徳藏般若波羅蜜經解題」『国訳一切經印度撰述部釈
經論部五下』大東出版社
- 柴田 泰 1963「無量寿莊嚴經本願文について」『印度学仏教学研究』第

11 卷第 1 号

- 柴田 泰 1964「無量寿莊嚴經について」『印度学仏教学研究』第 12 卷第 1 号
- 藺田香勲 1960『無量寿経諸異本の研究』永田文昌堂
- 武内孝善 1976「宋代翻訳経典の特色について 附・宋代翻訳経典編年目録」『密教研究』113 号
- 坪井徳光 1933「仏説大乘莊嚴宝王経解題」『国訳一切経印度撰述部密教部 五』大東出版社
- 林 和彦 1990『『大乘無量寿莊嚴経』にみられる阿弥陀仏信仰の性格』『仏教史学研究』33 (2)
- 藤田宏達 1970『原始浄土思想の研究』岩波書店
- 藤田宏達 2007『浄土三部経の研究』岩波書店
- 水谷真成 1999a～c『大唐西域記 1～3』東洋文庫、平凡社
- 六浦教乗 1964「大乘無量寿莊嚴経考」『宗教研究』37 卷 2 号
- 望月信亨 1939「大乘無量寿莊嚴経の研究」『浄土学』15
- 望月信亨 1946『仏教経典成立史論』法蔵館
- 李 慈郎 2011「戒律と教団」『シリーズ大乘仏教第三巻 大乘仏教の実践』春秋社
- 渡辺章悟 1995『大般若と理趣分のすべて』溪水社
- 渡辺章悟 2015「般若経の諸文献」『般若経大全』小峰彌彦・勝崎裕彦・渡辺章悟編、春秋社

註

- 1) 藤田宏達 2007、PP19-90
- 2) 本願の数は『無量寿経』と『如来会』が四十八、『梵本』が四十七、『チベット訳』が四十九であるため、これらを「四十八願系」という。(藤田：2007、P.89)
- 3) ・『莊嚴経』は四十八願系より前の成立であるとする説：〔望月 1939、1946〕〔春日井 1952〕〔小澤 1956〕〔園田 1960〕〔六浦 1964〕
・『莊嚴経』は四十八願系より後の成立であるとする説：〔池本 1952、

- 1961〕〔柴田 1963、1964〕〔藤田 1970〕〔香川 1975〕
- 4) 大田利生 1974、P.135
 - 5) 林 和彦 1990、PP.13-14
 - 6) 『大中祥符法宝録』卷第六の雍熙四（987）年の項に「是年又、天息災、法賢と改名せんと詔す」とあり、天息災が詔により法賢と改名したことが確認できる。
 - 7) 『仏祖統記』によれば、法賢は太平興国七（982）年六月に訳経院が完成から漢訳事業に関わり（大正 49.0398a26～28）、咸平三（1000）年に亡くなる前年まで漢訳事業を行ったとされる。（大正 49. 0402a23～24）
 - 8) 武内孝善 1976、PP.40-48
 - 9) 渡辺章悟 2015、P.64
 - 10) 椎尾辨匡 1936、P.339
 - 11) 三枝充恵 1971、P.61
 - 12) 密教經典は次の通りである。①『大乘莊嚴宝王經四卷』T1050 983年天息災訳、②『出生一切如来法眼遍照大力明王經二卷』T1243 983年法護訳、③『仏頂放無垢光明入普門觀察一切如来心陀羅尼經二卷』T1025 984年施護訳、④『一切如来正法秘密篋印心陀羅尼經一卷』T1023 984年施護訳、⑤『諸仏心印陀羅尼經一卷』T0919 986年法天訳、⑥『大方広菩薩藏文殊師利根本儀軌經二十卷』T1191986年天息災訳、⑦『仏説聖宝蔵神儀軌經二卷』T1284 987年法天訳、⑧『一切如来大秘密王未曾有最上微妙大曼拏羅經五卷』T0889 987年天息災訳、⑨『仏説文殊師利一百八名梵讚一卷』T1197 990年法天訳、⑩『仏説幻化網大瑜伽教十忿怒王大明觀想儀軌經一卷』T0891994年法賢訳、⑪『仏説持明蔵瑜伽大教尊那菩薩大明成就儀軌經四卷』T1169994年法賢訳、⑫『仏説妙吉祥最勝根本大教經三卷』T1217 994年法賢訳、⑬『仏説瑜伽大教王經五卷』T0890 995年法賢訳、⑭『仏説大乘八大曼拏羅經一卷』T1168A 995年法賢訳、⑮『仏説一切仏撰相應大教王經聖觀自在菩薩念誦儀軌一卷』T1051 996年法賢訳
 - 13) 般若經典は次の通りである。①『仏説聖仏母小字般若波羅蜜多經一卷』

- T0258 982 年天息災訳、②『仏説観想仏母般若波羅蜜多菩薩經一卷』
 T0259 986 年天息災訳、③『仏説徧照般若波羅蜜經一卷』 T0242
 991 年施護訳、④『仏説五十頌聖般若波羅蜜經一卷』 T0248 991 年
 施護訳、⑤『仏説仏母宝徳蔵般若波羅蜜經三卷』 T0229 991 年法賢訳、
 ⑥『最上根本大衆金剛不空三昧大教王經七卷』 T0244 999 年法賢訳
- 14) 経集部経典は次の通りである。①『仏爲娑伽羅龍王所説大乘經一卷』
 T0601 987 年施護訳、②『大乘宝月童子問法經一卷』 T0437 987
 年施護訳
- 15) 宝積部経典は次の通りである。①『仏説大迦葉問大宝積正法經五卷』
 T0352 986 年施護訳
- 16) 坪井徳光 1933、PP.85-88
 ・以下 17) ～ 21) では、大正蔵の該当箇所を示すにあたり、経典名を
 紙数の関係から大正蔵目録番号を記す。
- 17) ① T1243 大正 21.0212b16 ～ 21、② T1025 大正 19.725c17 ～ 19、
 ③ T1023 大正 19.0716b20 ～ 29、④ T1191 大正 20.0860b20 ～
 22、862c13 ～ 21、⑤ T1284 大正 21.0353a28 ～ b04、⑥ T0889 大
 正 18.0557c26 ～ 0558a01、⑦ T1197 大正 20.0938c07 ～ 12、⑧
 T1051 大正 20.0066a26 ～ 28、⑨ T0258 大正 08.0853a12 ～ 17、
 a21 ～ 25、c14 ～ 17、⑩ T0259 大正 08.0854b06 ～ 26、⑪ T0242
 大正 08.0782a19 ～ 23、a28 ～ b02、b08 ～ 12、b18 ～ 21、c04 ～
 08、⑫ T0244 大正 08.0789b22 ～ 29、0790b09 ～ 16、0791c13
 ～ 20、0793a02 ～ 05、0794a24 ～ 25、0815c17 ～ 19、⑬ T0601
 大正 15.0160a14 ～ 16、a25 ～ 27、b02 ～ 03、b11 ～ 13、b17 ～
 20、b23 ～ 25、c03 ～ 05、c11 ～ 14、c21 ～ 23、0161a01 ～ 03、
 ⑭ T0437 大正 14.0109c26 ～ 27
- 18) ① T0919 大正 19.001c21 ～ 26、② T1191 大正 20.862c13 ～ 21、
 ③ T1284 大正 21.0353a28 ～ b04、④ T1197 大正 20.0938c07 ～
 12、⑤ T1168A 大正 20.0676b08 ～ 11、c08 ～ 10、⑥ T1051 大正
 20.0066a26 ～ 28、⑦ T0258 大正 08.0853c14 ～ 17、⑧ T0242 大正
 08.0782a19 ～ 23、a28 ～ b02、b08 ～ 12、b18 ～ 21、c04 ～ 08、

- ⑨ T0248 大正 08.0845c29 ~ 0846a03、0846b08 ~ 11、⑩ T0244 大正 08.0789b22 ~ 29、0790b09 ~ 16、0791c13 ~ 20、0793a02 ~ 05、0794a24 ~ 25、0797b07 ~ 10、⑪ T0437 大正 14.0109c26 ~ 27
- 19) ① T1050 大正 20.0059c06 ~ 13、0061a22 ~ 29、b07 ~ 11、② T0919 大正 19.001c21 ~ 26、③ T1191 大正 20.0860b20 ~ 22、④ T1284 大正 21.0353a28 ~ b04、⑤ T0889 大正 18.0557c26 ~ 0558a01、⑥ T1197 大正 20.0938c07 ~ 12、⑦ T0891 大正 18.0584b01 ~ 02、0585b21 ~ 23、0586a07 ~ 08、⑧ T1217 大正 21.0093b15 ~ 22、⑨ T0890 大正 18.0564b09 ~ 10、b17 ~ 19、0565a11 ~ 14、b05 ~ 10、b17 ~ 19、c05 ~ c08、0566a02 ~ 0566a07、c08 ~ c10、0567a22 ~ 25、c13 ~ 15、c24 ~ 28、0568a18 ~ 20、b12 ~ 14、b23 ~ 25、0572a28 ~ b01、⑩ T1168A 大正 20.0676c08 ~ 10、⑪ T1051 大正 20.0066a26 ~ 28
- 20) ① T0258 大正 08.0853a12 ~ 17、a21 ~ 25、c14 ~ 17、② T0259 大正 08.0854b06 ~ 26、③ T0242 大正 08.0782a19 ~ 23、a28 ~ b02、b08 ~ 12、b18 ~ 21、c04 ~ 08、④ T0248 大正 08.0845c29 ~ 0846a03、b08 ~ 11、⑤ T0229 大正 08.0678b05 ~ 08、c20 ~ 21、0679a24 ~ 29、0680a07 ~ 08、a13 ~ 14、0682a25 ~ 26、⑥ T0244 大正 08.0790b09 ~ 16、0791c13 ~ 20、0793a02 ~ 05、0794a24 ~ 25
- 21) ① T0437 大正 14.0109c26 ~ 27
- 22) 渡辺章悟 1995、P.315
- 23) 横超慧日 1969、P.30
- 24) 横超慧日 1969、P.213
- 25) 横超慧日 1969、P.84
- 26) 林 和彦 1990、PP.13-14
- 27) 佐々木閑 2000、PP.195-204
- 28) 佐々木閑 2002、PP.64-68
- 29) 水谷真成 1999 a、PP.268-269、『大唐西域記』①卷四、大正 51.0889c13

- ～ 17、②卷四、大正 51.0890a28 ～ b04、③卷五、大正 51.0893c11 ～ 18、④卷五、大正 51.0896b04 ～ 07、⑤卷七、大正 51.0910a02 ～ 05、⑥卷七、大正 51.0910b14 ～ 20、⑦卷十、大正 51.0927a15 ～ 23、⑧卷十一、大正 51.0934a10 ～ 18、⑨卷十一、大正 51.0934c12 ～ 16、⑩卷十一、大正 51.0935a11 ～ 29、⑪卷十一、大正 51.0936b10 ～ 13、⑫卷十一、大正 51.0937a01 ～ 04、⑬卷十一、大正 51.0937c04 ～ 08、⑭卷十一、大正 51.0937c29 ～ 0938a07、⑮卷十二、大正 51.0940a12 ～ 17
- 30) 李 慈郎 2011、P.52